

序文

自分の手にペンをもつて文字を書くことは、心身への刺激になるばかりでなく、過去の人が作った字について考える知的な営みともなります。手書きをすることは、指先だけでなく脳へのよい刺激にもなり、文章力まで高まるという研究も京都大学の方々によつて公表されています。前著『なぞり書きで脳を活性化 画数が夥しい漢字121』は、『大漢和辞典』から特に画数の多い漢字を抜き出して手書きをするもので、類書のない珍しい中身をもつ一冊となりましたが、幸いにして好評をもつて世に迎えられました。前著で示した、日常生活の中で手書きを行うことの意義と効果をさらに広げるために、続編として本書が企画されました。今回の手書きの対象は「方言漢字」です。折しも稿者の編著である『方言漢字事典』(研究社、2003)が広く世に受け入れられ、作家の宮部みゆきさんにも読売新聞で書評をいただきました。方言漢字とは何らかの地域性を帯びた漢字のことと、地域漢字ともいいます。漢字は各地で使用されるうちに、その土地に合わせて字種、字体、字音、字義(用法)、使用頻度など、それぞれのレベルで大なり小なり地域色が生じるものなのです。

本書では、各県を代表する方言漢字の中でも、『大漢和辞典』に収められた字種の中で、方言漢字性の高い文字を選りすぐり、一つの都道府県につき二字以上として計一二八字を提示します。字種、用法のレベルで典型的で主要なものを選びました。県をまたいで使用されている「坪」(31%)「卓」(70%)「阪」(85%)などの字は、一つの県に代表させて示し、相互参照できるように

いましたが、こうした地域ごとの使用頻度の違いも注目していくべきでしょう。他にも例えば、魚名で「鰯」などの方言漢字が各地の文書に記されていたことも一部で報告されていましたが、伝承が絶たれて読めなくなってしまっているのが現実です。

近年、地域色の濃い漢字に対する研究が広まりつつあります。例えば、茂木俊伸「空から漢字を調査する—景観文字としての「聖」」(『国語国文学研究』55、pp.1-14)、熊本大学文学部国語国文学会(2004)は、地域性をもつ字体の研究に航空写真を使つという手法を編み出し、駆使しました。井上史雄・包聯群「方言表記と漢字の六書」と井上史雄「方言みやげの表記・カナ・漢字からアルファベットへ」(『静言論叢』7(2004))は、文字学や社会言語学の方法で地域色をもつ漢字・表記を分析する他、近世期の山形の庄内方言による会話文についても紹介しており、琉球王朝の「おもろそうし」の他にも、口頭言語に対する体系性をもつた表記があつたことを示しています。

『大漢和辞典』は、そうした方言漢字も結構拾い上げています。特に二〇〇〇年に刊行された袖巻で大幅に採用しました。実はその七年ほど前、私はJIS漢字の「幽霊文字」の候補に對して用例などを調べ考察し、近代語研究会で発表するレジュメを、早稲田大学の先生と神田にあつた大修館書店に赴き、編集長の方にお渡していました。袖巻にはそれを資料として参照してくれたと見られる記述もあります。その後に研究して新たに分かつたことまで、この本でさらに記述できたことを嬉しく思います。

方言漢字からは、私もたくさんのこと学到び、考えました。そして多くの皆様にその存在と意義まで教えていただきました。その主なポイントを記したコラム「ささひろポイント」「ワンポイ

しています。これらの方言漢字を実際に手書きしながら、その土地のことば、産物、風景を思い描いてみましょう。日本の多様な郷里の情景が見えてくるはずです。

方言漢字というと、その地方で作られた国字(日本製漢字)のことと直感的に思つてしまふ人がいますが、そつとは限らず、「方言」や俚言(俗語や地方特有の単語)、訛語(なまつた言葉)の在り方と同様に考えることが大切です。例えば、「汐」(67%)はシオの意(音はセキ)で全国で使われる漢字ですが、信州の南部では「暁」(けい)の略字として多用され、読み方も「せぎ」時に「せぎ」と訛り、用法に濃厚な地域性をもつ字なのです。内陸部では海の「潮汐」がないことからこの字があまり知られず、忘れられたり等閑視されたりし、ふだん使われずに「ヒマ」な漢字だったため、「方言漢字」になつたのです。

また、方言漢字は日本国内の一ヵ所でしか使われていない字、というイメージをもたれやすいのですが、方言の単語に東北と九州で一致するような周囲分布が知られるように、漢字にも「襞」(13%)のように東北と九州で同様の意味で使われている字があるのです。「襞」は中世に政治的・文化的な中央部である近畿地方で、辞書に現れた合字でした。漢字で「幌」とも書かれる語です。

これまでの方言漢字に関する研究を見てみると、かつて吉月圭吾・所三勇・児玉幸多編「具体例による歴史研究法」(吉川弘文館、2005)において、方言漢字の類を全国に募集したことがありましたが、残念なことに成果が公開されることはありませんでした。また、浅井潤子「近世地方文書用字考」(『史料館研究紀要』16、元々は、「せがれ」は特に信州の文書に「盼」という国字で書かれることが多いと指摘しています。むろん他の地でも使われて「方言漢字」になつたのです。

手書きでは、明朝体とは異なる書き方が慣習として存在し、それらは国語政策でも認められています。例えば、「剥」(20%)「櫛」(26%)の「月」を「月」のように書く字形がそれで、こうしたことでも「ささひろポイント」に書き込みました。巻末にも手書きのポイントが掲げてあります。

なお、地名や姓の現在の所在については、主に『角川日本地名大辞典』『平凡社日本歴史地名大系』、「稀少地名漢字リスト」<https://pyrite.s54.xrea.com/tme/>、「日本姓氏語源辞典」<https://name-power.net/>・書籍版を参照しました。

釋	嗎	枷	洛	京都府	鯉	琵	琶	滋賀県	渥	洒	三重県	鮓	鏡	杖	愛知県	樋	壩	静岡県					
84	83	82	81		80	79			78	77		76	75	74		73	72						
遙	耆	塔	島	取	縣	梗	洲	和	歌	山	縣	楨	嵒	奈	良	兵	庫	大	阪	大阪府			
95	94	93				92	91					90	89			88	87						
菜	暎	渭	德	島	縣	稻	堺	山	口	縣		鮓	稼	広	島	岡	山	縣	蓼	淞	島根県		
107	106	105				104	103					102	101			100	99			97	96		
卷	咤	老	佐	賀	縣	椭	机	福	岡	縣		梼	壠	社	高	知	111	110	109	讚	油	香川県	
118	117					116	115					114	113	112									
鶴	欅	餅	樺	宮	崎	植	喰	大	分	縣		础	嫩	塘	熊	本	125	124	123	122	121	長崎県	
129	128	127	126			125	124					123	122	121									
贈	塗	塗	鹿	兒	島	島	根	鳥	取	縣		山	口	廣	島	岡	山	香	川	縣			
132	131	130																					
琉	石	砾	沖	繩	縣																		
135	134	133																					

目次

序文	2	字の筆順／筆順の原則	138
凡例	6	手書きのポイント	137
部首の種類	7	音訓索引	140
方言漢字	8	北海道	136
おまけ漢字	7	蝦	135
		梭	10
		蛤	9
		蛤	8
		蛤	13
		蛤	12
		蛤	11
		蛤	17
		蛤	16
		蛤	15
		蛤	14
		蛤	26
		蛤	25
		蛤	24
		蛤	23
		蛤	22
		蛤	21
		蛤	20
		蛤	19
		蛤	18
		蛤	35
		蛤	34
		蛤	33
		蛤	32
		蛤	31
		蛤	30
		蛤	29
		蛤	28
		蛤	27
		蛤	43
		蛤	42
		蛤	41
		蛤	40
		蛤	39
		蛤	38
		蛤	37
		蛤	36
		蛤	58
		蛤	57
		蛤	56
		蛤	55
		蛤	54
		蛤	53
		蛤	52
		蛤	51
		蛤	50
		蛤	49
		蛤	48
		蛤	47
		蛤	46
		蛤	45
		蛤	44
		蛤	71
		蛤	70
		蛤	69
		蛤	68
		蛤	67
		蛤	66
		蛤	65
		蛤	64
		蛤	63
		蛤	62
		蛤	61
		蛤	60
		蛤	59

*もとは複数の漢字を形によって分類したグループ(「部首」)の最初(「首」)の字を指す。

部首の種類

部首*は、それが漢字のどの位置にあるかによって、次の七種類に大別されます。ただし、この分類に含まれない部首もあります。

部首の種類		部首の種類		部首の種類		部首の種類		部首の種類		部首の種類	
偏	ヘン	旁	ツクリ	脚	アシ	冠	カンムリ	垂	タレ	構	カマエ
漢字の左側の部		漢字の右側の部		漢字の上部につ		漢字の下部につ		漢字の上部から		漢字の外側を囲	
分を占める		分を占める		漢字の上部に位		漢字の下部につ		左方へおおう		左方から	
				置する。「かし		ら」ともいう				走り(えんじゆう)	
				ら」ともいう		雨(あめかんむり)				起(そうじゆう)	
						雪(せんじゆく)					
						雲(くも)					
						天(あま)					

本書に出てくる部首首足(五十音順)

部首*は、それが漢字のどの位置にあるかによって、次の七種類に大別されます。ただし、この分類に含まれない部首もあります。

部首の種類

部首*は、それが漢字のどの位置にあるかによって、次の七種類に大別されます。ただし、この分類に含まれない部首もあります。

字の書体は、本書を印刷する会社が所有する印刷書体(フォント)であり、大漢和辞典のフォントとは異なる。

なぞり書きにおける筆順

何らかの地域性を帯びた漢字。字種・字体・字音・字義・用法などに地域色が生じたもの(地域字種・地域字体など)。大修館書店発行『大漢和辞典(全十五巻)』(以下「大漢和辞典」)掲載の漢字のうち、方言漢字性の高い128字を抜粋した。

掲載順

北海道から沖縄県まで都道府県順に各県二字以上を掲載。同県内は縦順筆順・画数が同じ場合は部首順とした。総画数・部首は大漢和辞典に準拠。

部首

大漢和辞典の部首に準拠。漢字は表語文字であるため、見ただけでは確かな発音を知ることはできない。そこで、漢和辞典では、漢字を配列するのに一般に部首による方法が行われている。この「部首法」は、後漢の許慎が作った『說文解字』という辞書(紀元一世紀ごろ成立)に始まるときされている。↓「部首の種類」(7ページ)

◆見出し漢字とお手本
見出し漢字とお手本として薄く示した漢字であるため、見ただけでは確かな発音を知ることはできない。そこで、漢和辞典では、漢字を配列するのに一般に部首による方法が行われている。この「部首法」は、後漢の許慎が作った『說文解字』という辞書(紀元一世紀ごろ成立)に始まるときされている。↓「部首の種類」(7ページ)

見出し漢字とお手本

お手本漢字は、横線の終わりに三角形の字であるため、見ただけでは確かな発音を知ることはできない。そこで、漢和辞典では、漢字を配列するのに一般に部首による方法が行われている。この「部首法」は、後漢の許慎が作った『說文解字』という辞書(紀元一世紀ごろ成立)に始まるときされている。↓「部首の種類」(7ページ)

【出典】その漢字の出處となる書物の名前

筆順は書字の中で自然に生まれたもので、「正しい書き方」という唯一のものではなく、本書では示していない。基本的に「上から下」「左から右」の順に書けばよい。

下」「字の筆順/筆順の原則」(137ページ)

◆なぞり書きにおける注意点
お手本漢字は、横線の終わりに三角形の字であるため、見ただけでは確かな発音を知ることはできない。そこで、漢和辞典では、漢字を配列するのに一般に部首による方法が行われている。この「部首法」は、後漢の許慎が作った『說文解字』という辞書(紀元一世紀ごろ成立)に始まるときされている。↓「部首の種類」(7ページ)

【出典】その漢字の構造を解説

【大漢和番号】その漢字の大漢和辞典における通し番号。国字は日本製漢字を表す。

【地城音訓】その漢字の地域での読み方。

【字音】その漢字の音読み。大漢和辞典の記述を抜粋。

【字義】その漢字の意味。大漢和辞典の記述を抜粋して用例は省いた。

【名乗】日本人の名前に用いられたときの読み方。

【参考文献】『新漢語林』(大修館書店、二〇二二)

【解字】象形・指事・会意の三種について
【字義】象形で使われている言葉
【出典】その漢字の出處となる書物の名前
【U nicode】その漢字の文字コード
【文字の構造を解説】

【解字】象形・指事・会意の三種について

筆順は書字の中で自然に生まれたもので、「正しい書き方」という唯一のものではなく、本書では示していない。基本的に「上から下」「左から右」の順に書けばよい。

【出典】その漢字の出處となる書物の名前

筆順は書字の中で自然に生まれたもので、「正しい書き方」という唯一のものではなく、本書では示していない。基本的に「上から下」「左から右」の順に書けばよい。

【出典】その漢字の構造を解説

【大漢和番号】その漢字の大漢和辞典における通し番号。国字は日本製漢字を表す。

【地城音訓】その漢字の地域での読み方。

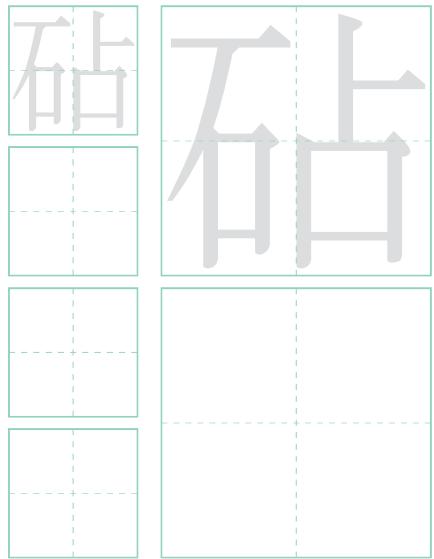
【字音】その漢字の音読み。大漢和辞典の記述を抜粋。

【字義】その漢字の意味。大漢和辞典の記述を抜粋して用例は省いた。

【名乗】日本人の名前に用いられたときの読み方。

【参考文献】『新漢語林』(大修館書店、二〇二二)

東京都



ささひろ・ポイント



この字は、世田谷区の地名としてよく知られていますが、漢文や古文つまり古典に出てきたから方言漢字ではないのです、と感じる人もいるでしょう。そういう場合は、本書の「はじめに」をじっくりと読んで、用語の意味とこの字の現在の状況をよく考えてみてください。漢字に限らず、古語が方言となつたものも、きっと思い当たることでしょう。

なお、「東京（京）」は明治維新後に、東の京（都）という名に反発して、「とうけい」と読む江戸っ子たちがいました。また、公園フォント（高速道路標識に用いられた文字）では、東京と京都でバランスが異なるとして「京」の字形を変えていました。

岩手県



【大漢和番号】 46973
【部首】 鳥
【総画数】 18
【地域音訓】 みさご
【字音】 シン
【字義】 鳥の名。
【出典】 海篇
【Unicode】 9D62

●ワンポイント 「みさご」を表す漢字の「鶴」 という字体が、各地で様々に変化したものの一つがこの字です。「鶴崎」は遠野市の地名ですが、地図では「ミサ崎」「みさ崎」とも表記されています。「身」が「みさご」の頭音「み」と重なっているのは、偶然ではないかもしれません。中世にはこの字を「シジュウカラ」と読む例もありました。

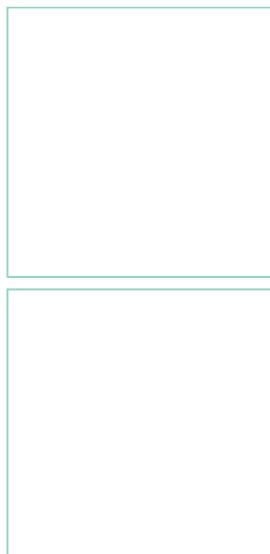
【砧】 キチ きりばん。俎板。
【砧骨】 キチツク 中耳内にある小骨。聴骨。
【砧鑽】 キチツヅ 人斬り台。人、この上に伏して斧を受ける。
【砧杵】 キチツヨウ きぬたと槌。衣を槌つ時に用いる器具。
【砧声】 セイシ きぬたを打つ音。

この他、6の熟語がある。

【鶴崎】 タカツキ 陸中国「現在の岩手県」の地名。

島根県

鼓
鼓



ワンポイント 熟語

「鼓」の音読みは「トウ」か「ズ」ですが、古辞書には「鼓タヂ」という用法も收められており、島根などでは松江市祭「鼓行列」のように、現在でも「ドウ」という地域音をもつてています。字体については下部を「冬」と書いても同じです。

【大漢和番号】48341

【部首】鼓

【総画数】18

【地域音訓】ドウ

【字音】トウ・ズ

【字義】①②鼓のおと。鼉タカ【大48383】・鼇タカ【大48356】に同じ。

【出典】集韻

【Unicode】9F15

熟語

【鼇鼓】 トウ 香のかおるさま。	つづみを打ち鳴らす。 ①太鼓の音。鼇鼓声。 ②呼する代わりに擊った太鼓をいう。街鼓。
------------------------	--

長野県

汐
汐

長野県の松本平（別名筑摩野）や隣接する群馬県では、用水路を意味する「堰」を分かりやすく書きやすくした「坊」と書くことがあります。読みの「せき」や訛語（訛った語形）の「せぎ」を、音読みでセキと読む「夕」の字に替えて書いたのです。また、水が関係することから「汐」の字で代用する人が、松本のほか諏訪盆地にもいました。これはかつて諏訪高島藩の用字となり、さらに略して偏は「夕（にすい）」でも書かれたりしました。「汐」は地名の表記に残り、今でも堰を管理する人には、こ

これらの字を帳簿に書く人がいるそうです。ちなみに「杓」「酌」などの字の旁である「勺」は、しばしば「夕」と書かれました。「汐」を「シャク」と読ませる滋賀県の小地名も、それによるものと思われます。日下部富藏『榮ゆく文字』〔55〕では「漢字の方言字」という項に、「我國にて作りたる漢字を国字といふ人あり」「これに似て或地方のみにて用ひらるゝ文字あり、これを地方字と名づけむ」とあり、「地方文字」とも呼んで例を挙げ、松本市の近在で「堰」を「坊」、金沢の田舎に「棚杉テガシ」（60）、岡山地方で「たを」を「毗ヒ」（98）とするものなどがあると述べています。

【大漢和番号】17122

【部首】水【汐】

【総画数】6

【地域音訓】せき

【字音】セキ・ジャク

【字義】①しお。うしお。②夕に起るしお。ゆうしお。③ひしお。千潮。④川の名。河南省登封県。

【名乗】キヨ。

【出典】集韻

【Unicode】6C50

熟語

【汐社】 シキヤ 宋の謝翱「ヨウ」が友を会した所。	【汐潮】 チセコウ 夕しおと朝しお。潮汐。
---------------------------------	-----------------------------

【汐曇】
チセコウ
潮のさしてくる時の水汽で空の曇ること。また、潮気のために海天の曇つて見えること。

熊本県

塘

塘

塘

【大漢和番号】5340

【部首】土

【総画数】13

【地域音訓】とも

【字音】トウ・ドウ

【字義】①つつみ。②いけ。③ため
いけ。④のみ。見張り。【塘報】
を見よ。⑤通じて隣『大41772』
と書く。⑥庫『大3709』に通じる。
⑦覗沿槽。

【Unicode】5858

さざひる・ポイント

「塘」は堤や土手を意味する古くからの漢字です。熊本では今でも堤のことを「とも」といって、この「塘」を江戸時代から当てきました。まさに地域字種・地域訓（方言訓）です。「塘」は音読みが「とも」と音義ともに合つたのでしょう。

肥後熊本藩では「塘奉行」という治水関係を司る役職が設けられました。熊本市内にある江戸時代の堤防「一夜塘」は有名で、史跡になっています。また、「錢塘」という地名は戦国期にすでに見られ、市内にある大梁山大慈寺を開山した禪僧寒巖義尹

「三七二〇〇」が留学先の宋からの帰国後に、宋の「錢塘陂」の故事にならって名付けたともいいます（八木田政名『新撰事紀通考』「郷莊沿革」（四四））。「塘」の代わりに簡単な「友」の字を当てた文書もあります（熊本近世史』年報「近世の宛行状」）。

「塘」は他に市電の電停名「杉塘」にも使われています。姓としては佐賀（ただしこみは「つつみ」）や鹿児島（「とも」）に多く見られ、「塘居」「塘内」などは熊本でも見られます。また、東日本では「トウ」という音読みでの使用が多く、北海道にも見られます。字体については、旁が「唐」と書かれることもあります。

【塘坳】オトウ
【塘下】カトウ
【塘報】カトウ
【塘下】カトウ
【塘報】カトウ
①堤塘官から本省に送る通報。
②〈tāng pào〉見張り兵の知らせ。
早馬の知らせ。また、斥候。

【塘它山】タツツミ
越前「現在の福井県」
の人。名は公愬。字は公甫・鴻佐。（略）
この他、20の熟語がある。

熟語